HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 条件と継起の連続性について ： 疑似条件形式を中心として |
| Author(s) | 風間, 伸次郎 |
| Citation | 北方言語研究, 7, 35-68 |
| Issue Date | 2017-02-15 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/64508 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 03_kazama.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 7: 35-68（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2017）

# 条件と継起の連続性について
## ―疑似条件形式を中心として―

風 間　伸 次 郎
（東京外国語大学）

## 0. はじめに

通言語的に見て、「明日雨が降れば私はそこに行かない」のような仮説条件[1]に使われるような典型的な条件形は、「丘を｛上ると／上ったら｝、海が見えた」のように既実現のデキゴトには用いられない、もしくは用いられにくい傾向がある。日本語に観察されるような事実条件は、SAE（Standard Average European）をはじめとする世界の多くの言語において、時間節などで示されるのがふつうである。ところがアルタイ諸言語や朝鮮語など、「アルタイ型」の言語[2]においては、典型的な条件形以外に、条件的な用法と時間節的用法、もしくは理由や逆接などの用法を併せ持つ形式が存在し、このような形式によって、事実条件を示すことができる。これを本稿では「疑似条件形式」と呼ぶことにする。他方で疑似条件形式は、理由の文や後件に無意志動詞が来る文などにおいて、継起を示す形式との意味的連続性を示す（「兄が｛怒ると／怒ったら／怒って｝妹が泣きだした」「昨日の晩は疲れて横に｛なったら／なると／なって｝寝てしまった」）。

本稿では、トルコ語、モンゴル語ハルハ方言（以下では単にモンゴル語と呼ぶ）、朝鮮語に関して調査を行い、日本語を含むこれらアルタイ型の言語における疑似条件形式の意味範囲をあきらかにするとともに、これらの言語における条件と継起の連続性を示す。さらに、（SAE などとは異なった）これらの言語における諸形式の使い分けの基準を明らかにすることを目的とする。

## 1. 日本語における事実条件に関する先行研究

以下は蓮沼（1993: 76-77, 79-80, 太字は筆者による）の記述による。

イ. 会話調の文では、「たら」も「と」も、後件にその主語が意図的にコントロールできるような動作を表すことができない、ないしは表しにくい。この制約は、同一主語の連続的動作を表す場合に強く働き、特にそれが話し手の場合にもっとも強く働く。

a. ゆうべご飯を｛食べ**たら**／?食べる**と**｝テレビを見ました。

ロ. 後件が意志的行為を表さない場合は上の制約が働かないため適格な文になる。

b. 布団に｛入っ**たら**／入る**と**｝そのままグーグー眠ってしまった。

c. 家に｛帰っ**たら**／帰る**と**｝、母からの小包が届いていた。

ハ. 物語調の文では、「と」は上の制約から自由になるが、「たら」は、依然としてこの制約を受ける。

d. 僕はテレビを消す**と**隣にある兄の部屋に入り、膨大な本の山の中から何冊かを選び出し、応

[1] 先行研究によって、「仮説条件」は「仮定条件」、「事実条件」は「確定条件」とも呼ばれる。先行研究の引用部分を除き、本稿では「仮説条件」および「事実条件」の呼び名で統一することとする。
[2] 亀井・河野・千野 (編) (1996: 28-29) および風間 (2014) を参照されたい。

接室のソファーに寝転んでそれを眺めた。（村上春樹「風の歌を聴け」）

仮説1: 事実的な「たら」は、前件の事態が成立した状況において、後件の事態を話し手が実体験的に認識するといった関係を表す場合に使用される。
仮説2: 事実的な「と」は、前件の事態が成立した状況における、後件の事態の成立、あるいはそれに対する認識の成立を、話し手が外部からの観察者の視点で語るような場合に使用される。

他方、無意志的な動作の連続に関して蓮沼 (1993: 84)は次のことを指摘している。

ここでは、前件・後件が、無意志的な動作や対象の変化を表すような場合に「たら」の使用が不自然になるケースを観察する。例えば、(12)のようなものがその例である。

(12) どんぐりはころころ{??ころがったら/ころがると}池に落ちた。

(12)は、無意志的な動作の「連続」の例だが、「と」には問題がないのに対し、「たら」の使用は極めて不自然である。その理由については、（中略）より本質的には、「話し手による後件事態の実体験的認識」といった条件が深くかかわっていると考えられる。すなわち、(12)で「と」の使用が自然なのは、「と」は話し手が対象の変化を客観的な観察者の視点で語るような表現上の特性をもっているからである。これに対して、「たら」は、前件の状況における話し手の新たな事態の現場的・直接的認知を表現するものである。ところが、(12)は、対象の順当な連続的変化を表すもので、話し手が自らに起こった「新たな認識」として表現する動機に欠けている。「たら」の使用が不自然なのはそのためだと考えられる。

ヤコブセン (2011:11) は「長いトンネルを抜けると、そこは雪国だった」や「廊下ですれ違った人は、よく見ると、太郎だった」のような事実条件文に関して、「その過去形がさしているのは，言及事態が過去のものであるというより（「その人が太郎である」こと，「そこが雪国である」ことは現在でも変わりはないはずである），話者の視点になっている基準時そのものが過去になっていることであり，それが「トンネルを抜けると」，「よく見ると」などによって指定されている瞬間的な時点である」としている。上記の文を現在形にすると、基準時を発話時として文が成立する：「そこは雪国だ」「その人は太郎だ」。ここで筆者は主節の過去形に注目したい。疑似条件は一見過去形だが、ヤコブセン (2011) の上記の指摘にあるように、恒常的な真理も示すことができる。したがってそれは発見時の現在であって、意外性（mirativity）を示す過去形であると考えられる。

ヤコブセン (2011: 7-8) では、事実条件は前件が出来事性のあるものである場合には成立するが、状態性のものである場合には成立しない、としている。：「外に出たら／出ると雨が降っていた」「*お金があったら／*あると、友達がたくさんできた」「*若かったら／*若いと、ある日願ってもない仕事にありついた」。他方、「比較的変わりやすい一時的な状態であるほど、事実的情報が許容されやすくなる傾向が見られる」としている：「お金がなくて困っていたら／いると、ある日願ってもない仕事にありついた」。最終的にヤコブセン (2011: 16) では、未完了アスペクトが話者の視点になっている基準時だけでなく、それ以外の時点においても言及の事態が生じるという「時間的複数性」が、仮定的な意味の成立に大きくかかわっているとみている。

## 2. 対照言語学的観点からの考察

### 2.1. 時間節と条件節の乖離した言語

『語学研究所論集』20 号の特集「連用修飾的複文の諸言語のデータ」では、次のような事実条件（なおアンケートでは確定条件と呼んでいる）の例文が 2 つ調査されている。

[12] 窓を開けると、冷たい風が入って来た。

[13] 丘を上ると、海が見えた。

日本語と異なり、これらの例文は、多くの言語で時間節等によって表され、条件文で用いられる典型的な形式は用いられない。なおデータがあるのは 25 言語であるが、14 言語で明らかに条件の用法を持たない時間節によって表現されていた[3]。以下では上記の[12]の文について、ここでは印欧語族のうち、ゲルマン語派のドイツ語、イタリック語派のフランス語、スラブ語派のロシア語の例を示す（グロスは本稿の方式[4]に変えた）。

［ドイツ語］（成田 (2015: 68)）

(1a) *Wenn ich das Fenster aufmachte, kam ein kalter Wind herein.
if I the window up-made came a cold wind in

(1b) Als ich das Fenster aufmachte, kam ein kalter Wind herein.
when I the window up-made came a cold wind in

［フランス語］（秋廣 (2015: 84)）

(2) Quand on a ouvert la fenêtre, le vent froid est entré.
when man has opened the window the wind cold is entered

［ロシア語］（宮内・佐山 (2015: 147)）

(3) Ja otkryl okno, i iz nego podul kholodnyj veter.
I opened window and from it blew cold wind

### 2.2. 時間節と条件節の連続した言語

これに対し、（一般に文法記述などにおいて）条件にも用いられるとされている形式が事実条件にも用いられたのは、日本語の他、トルコ語とモンゴル語、ダグール語、ナーナイ語、ソロン語、朝鮮語、ラワン語（チベット・ビルマ語族）、中国語[5]であった。中国語を除き、もっぱら SOV 語順の言語であり、アルタイ型の言語類型を持つ諸言語であると言える

[3] ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、フィンランド語、ハンガリー語、ロシア語、ニブフ語、カム・チベット語、マレーシア語、マダガスカル語、ウルドゥー語、アラビア語、ペルシャ語の 14 言語である。ただしイタリア語ではジェルンディオ、ロシア語では副動詞による表現も可能であり、これらの形式は文脈によっては条件や理由の意味も実現しうる可能性が考えられる。タミル語とトルクメン語で用いられる形式については、条件的な用法が可能であるのか判断が難しかったため保留とする。

[4] 4 節で後述するように、本稿のグロスには簡略なものを採用した。いずれの言語の例もそれぞれの言語における正書法に基づき、キリル文字の言語（ロシア語とモンゴル語）とハングルは転字した。モンゴル語の転字は梅谷 (2008)、ハングルからの転字は河野 (1947) の方式による。

[5] 中国語は主節に「就」を伴う文によるが、この文は条件文一般に広く用いられ、この要素のみで条件文が形成できるので、いちおうここに含めている。

だろう。

以下では本稿で扱う言語について、条件節と時間節が連続している状況と、両方の節に用いられる形式（本稿でいう疑似条件形）に関しての先行研究の記述を確認する。

### 2.2.1. トルコ語

事実条件の文において、トルコ語では次のように -INCA[6] という形式が使われる。

(4) Pencereyi aç-**ınca**, içeri serin rüzgar girdi.
window open-INCA into cool window entered （奥 (2015: 326)）
「窓を開けると，冷たい風が入って来た。」

この形式は恒常条件にも用いられる。

(5) Burada yaz gel-**ince** sık sık yağmur yağar.
here summer come-INCA often rain fall （奥 (2015: 326)）
「ここでは夏になると、よく雨が降る。」

なお -INCA は「〜すれば、すると」という直前の動作や条件、原因を表す副動詞であるという。林 (2013: 208, 要約による) は、-INCA について次のように記述している。

> ほぼ「〜するとすぐ」、「〜するやいなや」と訳せる。主語は同じでなくとも良い。典型的には、直前に起こった事態を表すが、それが拡張されて、「〜したので」、「〜すれば」のように原因や条件を表すこともある。

Lewis (1967: 179-180, 拙訳による、形態素の表記も本稿の形式による) は、-INCA について次のように記述している。

> これは主動詞の行為のすぐ直前に先行する行為を示す。 Otobüs gel-me-y-ince bir taksiye bindim. “As the bus did not come I got into a taxi.”
>
> より古い言語においては、-INCA は「まで（until）」を意味した。-INCA の古い意味はことわざに残っている。 Arap doyunca yer, Acem çatlayınca. “The Arab eats until he is satisfied, the Persian until he bursts.”

Underhill (1976: 381, 上に同じ) は -INCA について次のように記述している。

> この接辞は ‘as soon as’、もしくはよりさしせまっていない場合には、‘when’ を示す。-INCA 構造の主語は主節の主語と同じである必要はない。 Çocuk doktoru görünce hemen ağlamağa başladı. “As soon as the child saw the doctor, he at once began to cry.”

このような -INCA とは別に、トルコ語には仮説条件などで用いられる典型的な条件形 -SA や継起の形式 -IP がある。

(6) Yarın yağmur yağ-ar-**sa** oraya gitmem.
tomorrow rain rain-AOR-ISA there I.do.not.go
「明日雨が降ったら，私はそこに行かない。」

[6] 各形態素の異形態については、4 節でまとめて示すことにする。

なお林 (2013: 214) によれば、動詞に直接接続する -SA を用いる場合、話者は「具体的で切実な未来の問題として」生じうる状況について考えているという。これに対し、-AOR-SA は「少し余裕をもって想定している感じ」であるという（ -AOR に続く -SA はコピュラに -SA のついたものに由来する後置詞であり、動詞語幹につく -SA とは別形式であるが、本稿のグロスでは便宜上同形のグロスを用いる）。

### 2.2.2. モンゴル語

モンゴル語では、事実条件の文において、次のように -NGUUT、もしくは -TAL という形式が使われる。

(7) Conx ongoilgo-**nguut** xüiten salxi orž irsen.
window open-NGUUT cold wind entering came （山田 (2015: 186)）
「窓を開けると、冷たい風が入って来た。」

(8) Ögsüür zamaar ögs-**töl** dalai xaragsan.
slope along.road go.up-TAL sea was.seen （山田 (2015: 186)）
「坂道を上ると、海が見えた。」

下記の例は内モンゴルのバイリン方言のデータであるが（表記は山田 (2015) による）、ここでは -SAN ČIN’ という形式が用いられている。この形式はハルハ方言でも用いられるので、以下の考察や調査ではこの形式も取り扱うことにする。

(9) Čonk nəə-**sən=čin** xiitən ǰawar orǰ irbə.
window open-SAN ČIN’ cold wind entering came
「窓を開けると、冷たい風が入って来た。」 （山田 (2015: 186)）

(10) Dəb dəər gar-**sən=čin** dalee üǰəgdbə.
slope above go.out-SAN ČIN’ sea was.seen
「丘を上ると、海が見えた。」 （山田 (2015: 186)）

山越 (2012: 139) によれば、-NGUUT は即時連用形とされており、「A の動作をし終えてすぐに」という意味を示すと記述されている。ただしあがっている例文には「たら」による条件的な訳が付されている。

(11) Tsalingaa ava-nguut-aa juny ömnö nögöö xamtlagijn šine CDg avax sanaataj.
salary take-NGUUT-REF what’s before that group’s new CD take intend.to
「給料をもらったら何よりもまずあのグループの新しい CD を買うつもりだ。」
（山越 (2012: 139)、グロスは筆者、訳は山越 (2012) による）

山越 (2012: 140) によれば、- TAL は限界連用形とされており、「A の動作をするまで B する」という意味を示すと記述されている。しかし他方で条件表現的な用法があることも指摘されている（Kullmann and Tserenpil (1996: 168)）。Kullmann and Tserenpil (1996: 168) は 6 例を挙げているが、どれも文末述語は過去形で、（最後の例を除き）事実条件文とみなせるものである。しかも、従属節の動作をきっかけに主節のデキゴトが起こる、もしくは従属

節の動作をきっかけに主節の状態を従属節の主体が発見する、という文になっており、日本語の「と」「たら」による事実条件文と良く似ていることがわかる。Kullmann and Tserenpil (1996: 168) より 1 例を示しておく。

(12) Ter utas av-**tal** tasarčixav.
that line take-TAL was.broken
"As he picked up the telephone, he got cut off."「彼が電話をとると、切れてしまった。」

山越 (2012: 206) によれば、完了連体形（-sAn）＋čin' の形式が、「～したら」「～したところ」といった意味の副詞節を作るとされている。これは日本語のテハと構成が良く似ている（čin'は現代モンゴル語で主題を示す要素として機能している、梅谷 (2003) 参照）。

(13) Jaaraltaj nojl'd or-son čin' nojlijn caas bajxgüj bol jaax ve?
hastely to.toilet enter-SAN ČIN' toilet's paper nothing if how.to.do Q
「急いでトイレに入って、トイレットペーパーがなかったらどうしますか？」
（山越 (2012: 206)）

(14) Ter teatrt očson. Teg-sen čin' dagvataj uulzsan.
that to.therater reach do.that-SAN ČIN' with.PN meet
「その劇場に行きました。そしたらダグワに会いました。」（山越 (2012: 206)）

どちらも事実条件文的な文（(13)の例は二重の複文になっているため文全体は一般論になっているという問題点はあるが）になっている。しかも、従属節の動作をきっかけに、主節の状態を従属節の主体が発見する、という文になっており、日本語の「と」「たら」による事実条件文ととても良く似ている。

なおモンゴル語には他に仮説条件などで用いられる典型的な条件形 -VAL がある。

(15) Margaaš boroo or-bal bi tend očxgüi.
tommorow rain to.enter-COND 1SG there to.go-FUT=NEG
「明日雨が降ったら、私はそこに行かない」（山田 (2015: 187)）

これに対し、モンゴル語で継起を示す -AAD は理由の意味を伴っても用いられる。

(16) Öčigdör arvan cagd gertee xariad,
yesterday ten at.o'clock to.own.house go.back-AAD
ǰaaxan tjeljeviz üzeǰ bai-g-aad untsan.
a.little TV watching be-E-AAD slept
「（私は）昨日は 10 時に家に帰って、少しテレビを見て（から），寝ました。」
（山田 (2015: 183)）

(17) Öčigdör šatnaas un-aad gemtčixsen.
yesterday from.stairs to.fall-AAD got.hurt
「（私は）昨日階段で転んで、ケガをしてしまった。」（山田 (2015: 183)）

### 2.2.3. 朝鮮語

朝鮮語で事実条件を示す形式には、-NIGGA および (-PST)-DƏNI という形式が観察される。

(18) Caŋmun'ur {'yə-ni(gga) / 'yər-əss-dəni} caga'un balam'i dɯr'ə 'oassda.
window {open-NIGGA / open-PST-DƏNI} cold wind entering came
「窓を開けると、冷たい風が入って来た。」 （黒島・孫 (2015: 170)）

(19) 'Əndəgɯr {'olla ga-ni(gga) / 'olla ga-ss-dəni} badaga bo'yəssda.
hill {go.up go-NIGGA / go.up go-DƏNI} sea was.seen
「丘を上ると、海が見えた。」 （黒島・孫 (2015: 170)）

菅野他（編）(1988: 223) によれば、-DƏNI は「～していると」「～していたが」「～していたので」、-PST-DƏNI は「～すると」と意味の記述がなされている。-DƏNI には 3 人称主語で前件と後件が同主語の例文が、-PST-DƏNI には前件と後件が異主語（1 人称-3 人称の組み合わせ）の例文があげられている。

油谷他（編）(1993: 430, 497) によれば、-NIGGA は主に原因・理由を示す形式、-DƏNI も主に理由を示す形式とされているが、-NIGGA, -DƏNI のいずれにも条件的意味の用法がある。

-nigga ～すると、～したが、～したら
ddairi-**nigga** 'unda.「殴ると泣く」
cinguga bogopasə caj'aga-**nigga** 'oicɯrhago jib'əi 'əbs'əssda.「友達に会いたくて訪ねて行ったところ外出して家にいなかった」

ここで注目したいのは、最初の例が恒常的であるのを除き、残りはすべて事実条件文である、という点である。しかも従属節の動作をきっかけに、主節の状態を従属節の主体が発見する、という文になっており、日本語の「と」「たら」による事実条件文と良く似ている。

-deni あとにつづく状況の前置きを表す：～すると、～したら、～したかと思うと、～してしまうと
'ɯmsig'ɯi bijggar'i gob-**dəni** gɯ masdo mai'u johda.「料理の彩りが美しいとその味まで非常に良い」
naiga gass-**dəni** modu bangyo ju'əssda.「私が行ったら皆喜んでくれた」
səriga 'o-**dəni** ggoc'i da sidɯr'əssguna.「霜が降りると花が皆しおれてしまった」

ここでも、最初の例を除き、すでにデキゴトが生じた事実条件文になっている。「あとにつづく状況の前置きを表す」ということは、「「と」は主節の動作を行う状況を設定する」（日本語記述文法研究会 2008: 108）とあるのによく似ている。

Song (2011) はコーパス調査による接続関係を中心とした -NI(GGA)[7], -DƏNI, -'ƏSS-DƏNI の 3 形式の意味機能に関する研究であるが、これらによる継起の複文における同主語／異主語の問題を検討している点で重要である。Song (2011: 204-205) は次のように述べている：「-dəni の場合、継起的接続は典型的に同一行為者による連続的な行為を表すが、-'əss-dəni

[7] Song (2011) はいくつかの先行研究に倣い、-NIGGA を -NI の強調形として扱っている。

は同一行為者の連続的な行為を示すのには用いられない。（中略） この点で -’əss-dəni の継起的接続は -ni(gga) と類似している。（したがって）-’əss-dəni はしばしば -ni(gga) と入れ替えることができる」（拙訳による、ハングルは本稿の方式で転写した）。なお Song (2011: 204-205) は 3 形式の機能をそれぞれ、-NI(GGA)：因果、認知、反応、継起、補充、対照、譲歩、-DƏNI：因果・継起・補充・対照、-’ƏSS-DƏNI：因果、認知、反応、継起、補充、対照とし（太字・下線はもっとも頻度の高かった用法）、-DƏNI および -’ƏSS-DƏNI は -DƏ および -’ƏSS-DƏ に -NI が後続して形成されたもので、機能的にも -NI の一部の機能を実現するものであるとしている。

五十嵐 (1997: 17) は Nam・Ru (1983: 3) を引いて次のように説明している。

> 「A -’ese B」の文章構造は本質的に‘相関的な継起性(related sequence)’である。つまり‘Aの次にそれと何らかの相関性を持ち、Bが後続すること’を表わす。そのような相関的な継起性はAがBの原因であることを表わす潜在的な可能性を持っている。したがって「A -’ese B」は論理的な形式としては‘原因の言明’である。一方「A -nigga B」の文章構造は本質的に‘AであるときBだ、という事実を発見する（発見するようになる）’という‘発見(discovery)’である。そのような発見はAが、Bに対する説明であるとかBを合理化する根拠であり、(Bの事実を信じるようになる)Bの原因であることを表わす潜在性を備えている。それゆえ「A -nigga B」は論理的な形式としては‘論証(argumentation)’である。 （一部省略、ハングルは本稿の方式で転写した）

なお朝鮮語には仮説条件文などで用いられる典型的な条件形 -MYƏN が別に存在する。

(20) Nai’ir biga ’o-myən nanɯn gegi’əi ’an ga-nda
tomorrow rain come-MYƏN I there not go
「明日雨が降ったら、私はそこに行かない」 （黒島・孫 (2015: 170)）

こうした朝鮮語の -MYƏN （やモンゴル語の -SAN ČIN’）は、日本語の古文でも、未然形＋バが仮説条件を示し、已然形＋バが確定条件・理由を示していたことも想起させる。

### 2.2.4. 時間節と条件節の連続した言語に関するまとめ

以下では、もっぱら反実仮想や仮説条件に用いられる形式を「真正条件形式」、事実条件を中心に用いられる形式を「疑似条件形式」、日本語のテ形のような形式を「継起形式」と呼ぶことにする。各言語におけるそれぞれの形式を確認するならば、次のようになる。

表 1: 各言語における真正条件形式と疑似条件形式と継起形式

| | トルコ語 | モンゴル語 | 朝鮮語 | 日本語 |
|---|---|---|---|---|
| 真正条件形式 | (-AOR)-SA | -BAL | -MYƏN | -BA |
| 疑似条件形式 | -INCA | -SAN ČIN’, -NGUUT, -TAL | (-PST)-DƏNI, -NIGGA | -TO, -TARA |
| 継起形式 | -IP | -AAD | -ASƏ | -TE |

本稿の狙いは今回の対象言語における疑似条件形式の使用範囲を明らかにするとともに、3 者が連続している状況と、連続しながらも使い分けがなされているその要因を明らかにすることである。

## 3. 調査

日本語については、『語学研究所論集』16 号・20 号の特集、および日本語記述文法研究会（編）(2008) の説明にあがっている 14 の例文を使用する（下記の[1]-[14]）。まず日本語に関しては、太字・下線の形式をデフォルトとし、他の形式について 20 名のコンサルタントから、「1. まったく言えない（1 点）」／「2. 少し変だが言える（2 点）」／「3. 問題なく言えるが、意味がかなり違ってきてしまう（3 点）」／「4. 全く問題なく言える、意味もデフォルトの形式と大差ない」の 4 択の判断をしていただき、「3.」を選んだ場合にはその意味の違いについても書いていただいた。その結果は、諸形式の後ろに 20 名の平均値（x）と「3.」を選んだ人数を（x/y）のように表示した。他の言語については、1 人のコンサルタントから聞き出し（elicitation）によって調査を行った。調査に使用したのは下記の 14 の例文である。なお *は非文（日本語では x の数値が 2 未満）を、?はやや不自然であること（同じく 3 未満）を、#は異なった意味になってしまうこと（上記 y の人数を参考に筆者の内省も交えて判断した）を示す。

[1] お金が｛**あれば／あったら**／あると／あって｝、あの車を買うんだけれどなあ。
［反実仮想］

[2] 明日｛**雨が降れば／雨が降ったら**／雨が降ると／雨が降って｝、私はそこに行かない。
［仮説条件］

[3] 駅に｛**着いたら**／着けば／着くと／着いて｝電話してください。
［仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令）］

[4] ここでは｛**夏になると**／夏になれば／夏になったら／夏になって｝、よく雨が降る。
［恒常条件］

[5] 箱を｛**開けると／開けたら**／開ければ／開けて｝、中にハンカチが入っていた。
［事実条件］

[6] その料理を｛**食べてみたら**／食べてみると／食べてみれば／食べてみて｝、おいしかった。
［事実条件・人称制限述語］

[7] 兄が｛**怒ると／怒ったら**／怒れば／怒って｝、妹が泣き出した。［原因･異主語］

[8] 風邪を｛**ひいて**／ひけば／ひくと／ひいたら｝、仕事を休んだ。［原因･同主語］

[9] 音楽を｛**聞いていたら**／聞いていると／聞いていて／聞いていれば｝、人が来た。
［継続中生起・異主語］

[10] 私｛は／が｝部屋に｛**入って／入ると**／入れば／入ったら｝ドアに鍵をかけた。
［継起的行為・1 人称主語］

[11] 昨日の晩は疲れて、横に｛**なると**／なって／なったら／なれば｝寝てしまった。
［継起的行為・1 人称主語・後件無意志］

[12] ボール｛は／が｝｛**ころがって**／ころがると／ころがれば／ころがったら｝池に落ちた。
［継起的事象・無生物主語］

[13] 冷蔵庫を｛**開けて**／開けると／開ければ／開けたら｝、ビールを取り出した。
［継起的行為・同一主語］

[14] 袋から｛出して／出したら／出せば／出すと｝、それを食べろ。
［継起的行為・主節の有標なモダリティ（命令）］

コンサルタントは下記である。日本語以外の言語に関してだが、どのコンサルタントも日本語をある程度以上理解するので、もっぱら日本語を媒介言語に使用して調査を行った。

表 2：コンサルタントの情報

| 言語 | 生年 | 出身地 |
|---|---|---|
| 日本語（計 20 名） | 1982-94 | 関東（11）、北海道（2）、中部（3）、山陽（2）、九州（1）、近畿など（1） |
| トルコ語 | 1981 | イスタンブール |
| モンゴル語 | 1991 | ウランバートル |
| 朝鮮語 | 1978 | 慶尚北道醴泉郡 |

## 4. 個々の例文に関する調査結果

この節では個々の例文に対する話者の適格性の判断とともに、例文に対する話者の内省によるコメントを記し、諸形式の持つ特性について考えていく。

紙幅の都合上、グロスは簡略化したものを用い、主に動詞の部分にのみ詳しいグロスを付した。問題となる諸形式は、現時点でその機能を条件や継起などと決めつけることはできないため、その形式をもってグロスとしてある。全言語における接辞と付属語の違いについても筆者の力量に余るものと考え、一括してハイフン（-）で示している。

以下で扱う形式とその異形態を示しておく（大文字は母音調和による異形態があることを示す）。

トルコ語：-sA, -(y)IncA, -(y)Ip
モンゴル語：-bAl~-vAl, -sAn čin’, -ngUUt, -tAl, -AAd
朝鮮語：-(ɯ)myən, -’Ass-dəni, -(ɯ)nigga, -’(A)sə

### 4.1. 反実仮想

[J1] お金が｛**あれば／あったら**／*あると（1.8/0）／*あって（1.8/5）｝、
あの車を買うんだけれどなあ。

後件に有標のモダリティがある場合、「と」は使えない。「あって」を用いるとそれは理由の節として解釈され、お金はあるのだが別の理由で買えないと解釈されるという内省があった。

[T1] Param {ol-sa-ydı / ol-sa / *ol-unca / *ol-up}
my.money {be-SA-PST.COP / be-SA / be-INCA / be-IP}
o arabayı al-ır-dı-m.
that car buy-AOR-PST.COP.1SG

ol-sa-ydi は-SA に過去の後置詞がついたもので、必ず「それが実現しなかった」という解釈になるという（林 (2013: 215)）。ol-unca は、文末の反実仮想の述語形とは共起しないと

判断された。Param olunca o arabayı alırım.「お金があればあの車を｛買うつもりです／買うことができます｝」という、仮説条件文であれば ol-INCA を使うことができるという。

[M1] Xerwee möngötej {baj-san bol / baj-val / *baj-san čin' / *baj-nguut
if with.money {be-PST if / be-BAL / baj-SAN ČIN' / baj-NGUUT
/ *baj-tal / *baj-g-aad} ter mašinyg avax san.
/ baj-TAL / baj-E-AAD} that car buy be.COP

baj-san bol はお金が入る見通しもないのに対して、baj-val は、（今その車を販売していないなど）別の理由で買うことができない状況にあり、お金が入れば買おうと思っている状況であるという。baj-san čin' は何らかの結果が生じなければ使うことができず、例えば Möngötej baj-san čin' ter mašinyg avč čadsangüj.「お金はあったが、あの車は買えなかった」のような文であれば言えるという。この文では -SAN ČIN' が逆接で訳され得る点に注意されたい。baj-nguut もこの文では使えないが、動詞を替え、Xervee möngötej bolo-nguut čin' ter mašinyg avax san.「（お金が入るメドはあり）もしお金ができたらすぐ、その車を買いたいなあ」とすれば言えるという。-NGUUT を使用するには、新しい状況の生起のような条件が必要であるようだ。baj-tal に関しては、Möngötej baj-tal ter mašinyg avsangüj.「（あの人は）お金があったけど、その車を買わなかったなあ」であれば言えるという。やはり既実現のデキゴトでなら成立することが分かる。これも逆接で訳され得る点に注意したい。baj-g-aad を用いると、「お金もないし、車も買いたいけど（買えないし）」という意味でなら、かろうじて発話可能であるという。Möngötej bolž baj-g-aad ter mašinyg avax san.とすれば言えるが、これは「お金持ちになってからあの車を買うんだけどな」という意味で、子供が将来のことを語る時などに典型的に発話する文であるという。この文はもはや条件文ではないと考えられる。「お金持ちになる」のは、意志的に実現することと捉えられているようだ。

[K1] Don'i {'iss(-'əss)-ɯmyən / *'iss(-'əss)-dəni / *'iss-'ɯnigga / *'iss-'əsə}
money {be-PST-MYƏN / be-PST-DƏNI / be-NIGGA / be-ASƏ}
jə carɯr sa-r təindəi.
that car buy-ADN should.be.though

### 4.2. 仮説条件

[J2] 明日｛雨が降れば／雨が降ったら／?雨が降ると（2/0）／*雨が降って（1.6/4）｝、
私はそこに行かない。

「雨が降って」を用いると、未来のことであるのに「雨が降る」ことがすでにわかっている感じがするという内省の者が 3 人いた。その場合、節間で因果関係が感じられるという。他方、節間に関係が感じられなくなるという内省もあった。

[T2] Yarın yağmur {yağarsa / *yağsa / *yağınca / *yağıp}
tomorrow rain {fall-AOR-SA / fall-SA / fall-INCA / fall-IP}

oraya gitmem.
there I.do.not.go

[M2] Margaaš boroo {or-vol / *or-son čin’ / *or-nguut / #or-tol / *or-ood}
tomorrow rain {enter-BAL / enter-SAN ČIN’ / enter-NGUUT / enter-TAL / enter-AAD}
bi tend očixgüj.
I there not.go

or-nguut は否定形と共起しないという。他方、肯定形の Margaaš boroo or-nguut bi tend očno. とすれば言えるが、これは確実に雨が降ると知っている場合で、「明日雨が降り始めたらすぐ行く」という意味になるという。or-tol の文は言えるが、「雨が｛降るまで／降り始めないうちは｝行かないよ（降り始めたら、行くよ）」という意味になるという。

[K2] Nairɯr biga {’o-myən / *’o(-ass)-dəni / #’o-nigga / *’o-asə}
tomorrow rain {come-MYƏN / come-PST-DƏNI / come-NIGGA / come-ASƏ}
nanɯn gəgi’əi an ganda.
I there not go

’o-nigga も問題なく言えるが、これを用いると「(天気予報などによりすでに知っていて）雨が降るから（行かない)」という理由を示す文となるという。

### 4.3. 仮説条件＋主節の有標なモダリティ（命令）

[J3] 駅に｛<u>着いたら</u>／*着けば（1.7/1）／*着くと（1.3/3）／*着いて（1.8/1)｝
電話してください。

「着くと」は引用、すなわち電話で伝える内容に解釈されるという内省があった。「ついて」を用いると、「駅に着いて電話する」までが命令のスコープに入るという内省もあった。

[T3] İstasyona {var-dığ-ınız-da / *var-sa-nız / var-ınca / *var-ıp}
station {arrive-PTCP-2PL-LOC / *arrive-SA-2PL / arrive-INCA / *arrive-IP}
arayın lütfen.
call please

var-dığ-ınız-da による文は、『語学研究所論集』16 号に記載されていた本来の（適格な）文である。

[M3] Buudal deer {ir-vel / *ir-sen čin’ / ir-e-nguut / #ir-tel / #ire-eed}
station above {come-BAL / come-SAN ČIN’ / come-NGUUT / come-TAL / come-AAD}
utasdaaraj.
call.please

ir-vel を用いると、「(駅は本来の目的地ではなく、たまたまその）駅に来るようなことがあったなら、電話してください」という意味に解釈されるという。このことから -BAL による従属節は、予測している事態には用いられないことが分かる。ir-sen čin’ は主節と異なる

人物が駅に来るという解釈でも言えないという。Buudal deer ir-sen čin' utasdaagüj.「(話者である自分が）駅に着いて（待って）いたが、(電話してくれるはずだった人が）電話してくれなかった」であれば言えるという。-SAN ČIN' に後続する主節には予想外のデキゴトが要求されることが分かる。ir-e-nguut を用いると、「駅に着いたら**すぐに**電話してください」のようなニュアンスが生じるという。ir-tel を用いると、「駅に着くまでずっと、何度も繰り返し電話してください」のような意味に解釈されるという。ire-eed を用いると、「駅に着いてから電話してください」のような意味に解釈されるという。

[K3] 'Yəg'əi {docagha-myən / *docaghai(-ss)-dəni / #docagha-nigga / #docaghai-sə}
to.station {arrive-MYƏN / arrive-PST-DƏNI / arrive-NIGGA / arrive-ASƏ}
jənhoahai jusəi'yo.
calling give

なおこの文ではさらに主節が有標のモダリティ（命令・勧誘・意志）を持つ場合にのみ使用が可能である条件形 -GƏDUN を使用することも可能である（'yəg'əi docagha-gədun jənhoahai jusəi'yo.）。-MYƏN を用いた場合と意味や話者の位相に違いはないという。docaghai-ss-dəni は、後続する主節が jəncərɯn 'imi curbarhaissda.「電車はすでに出発していた」のような予想外の事態である場合になら言えるという。この場合従属節には 1 人称が可能で、主節に異主語をとることができるという。これに対し、docaghadəni では、まず従属節は2人称もしくは3人称で、主節も同じ主語でなければならないという。gɯ sarami 'yəgəi docaghadəni sinmunɯr sassda.「(あの人は）駅に着いたら新聞を買った」のような文なら発話可能であるという。docagha-nigga は「(私もしくは誰かが何時に）駅に着くから、電話をしてくれ」という解釈に、docagha-isə は「(自分が）駅に着いてから電話をしてくれ」という解釈になるという。このように -DƏNI が 1 人称主語を許容しないのは、五十嵐 (1997) の先行研究でみたように、この -DƏNI が「発見」という特徴を持っているために発見者自身である話し手の動作を表現できないためであると考えられる。ただし管見の限りではこのような人称制限について明言している先行研究は見当たらない。

### 4.4. 恒常条件

[J4] ここでは｛**夏になると**／夏になれば（3.5/3）／夏になったら（3.8/1）／*夏になって（1.6/2)｝、よく雨が降る。

「なれば」を用いると、冬などとの対比的ニュアンスが生じるという内省があった。「なって」を用いると、すでに夏になった時点での発話に感じられるという内省があった。

[T4] Burada yaz {*gel-ir-se / *gel-se / gel-ince / *gel-ip}
here summer {come-AOR-SA / come-SA-2PL / come-INCA / come-IP }
sık sık yağmur yağar.
often rain fall

[M4] End zun {bol-vol / *bol-son čin’ / bol-nguut
here summer {become-BAL / become-SAN ČIN’ / become-NGUUT
/ #bol-tol / *bol-ood} boroo ix ordog.
/ become-TAL / become-AAD} rain much fall

この内容では、bol-nguut を用いるのがもっとも自然であるという。bol-vol を用いた文は、（この土地のことをよく知らない人が）「ここは雨降らないんだね？」と訊いたのに対して、「（いやいや）夏になったらたくさん降るんだよ。」と答えるような場合に用いるという。bol-nguut による文が恒常的な原理を示すのに対し、（まだ現在は夏になっていない）現在の事実に反する事態の成立を仮定して述べる場合に用いられるわけであり、これはもはや恒常条件ではなく、反実仮想とみなすべき文となってしまう。bol-son čin’ は、End zun bol-son čin’ boroo ix orsongüj.「（ふつうはたくさん降るのに）そして夏になったのに、なぜか今年はたくさん降らなかったなあ」のような文、すなわち主節に予測不可能であった事態が来る文でなら使用できるという。bol-tol を用いると、「ここは夏になるまではいつも雨がたくさん降る（夏になったら降らなくなる）」と解釈されるという。

[K4] ’Yəginɯn {’yəlɯm‘i-myən / *’yəlɯm’y(-əss)-deni / #’yəlɯm’i-nigga
here {be.summer-MYƏN / be.summer-PST-DƏNI / be.summer-NIGGA
/ #’yəlɯm’i doi-sə} biga jaju ’obnida.
/ summer become-ASƏ} rain often come

’yəlɯm’inigga を用いると「（今ここは）夏だから雨が良く降るよ」と解釈され、’yəlɯm’i doi-sə を用いると「（今）ここは夏になっていて雨が良く降る」と解釈されるという。

### 4.5. 事実条件

[J5] 箱を｛<u>開けると／開けたら</u>／??開ければ（2.2/1）／*開けて（1.9/0）｝、中にハンカチが入っていた。

筆者には「開ければ」を用いると、恒常的な条件のように感じられる。

[T5] Kutu {*aç-sa-m / aç-ınca / *aç-ıp} içinde mendil vardı.
box {open-SA-1SG / open-INCA / open- IP} inside handkerchief was

[M5] Xajrcagijg {ongojl-vol / ongojl-tol / ongojlgo-nguut / ongojl-son čin’ / *ongojlg-ood}
box {open-BAL / open-TAL / open-NGUUT / open-SAN ČIN’ / open-AAD}
dotor n’ üzeg bajsan.
inside 3SG pen was

なお、「ハンカチ」にあたる名詞が訳しづらいようだったので、ここでは üzeg 「ペン」に替えた。主文が過去の場合には-BAL はふつう使えないのだが、この文では使えるという。ongojlgo-nguut を用いると、「開けたら**すぐに**入っていたのに気づいた」のようなニュアンスが出るという。

[K5] Sangjarɯr {*’yər-ɯmyən / ’yər-’əss-dəni / *’yər-dəni / ’yər-’ɯnigga / *’yər-’əsə},
box {open-MYƏN / open-PST-DƏNI / open-DƏNI / open-NIGGA / open-ASƏ}
’an’əi sonsugən’i dɯr’ə ’iss’əssda.
inside handkerchief enter was

’yər-’əss-dəni と ’yər-’ɯnigga を用いた文の意味はほぼ同じであるという。’yər-’əsə を用いると、主節に「何か入れた」、「中を見た」のような意志的な動作が続く気がするという。

### 4.6. 事実条件・人称制限述語

[J6] その料理を｛食べてみたら／食べてみると（4/0）／?食べてみれば（2.5/0）／?食べてみて（2.7/0)｝、おいしかった。

[T6] O yemek {*yi-se-m / yi-yince / *yi-yip} lezzetliydi.
that food {eat-SA-1SG / eat-INCA / eat-IP} delicious

[M6] Ter xoolijg idež {üz-vel / üz-sen čin’ / *üze-ngüüt / üz-tel / *üzeed}
that food eating {see-BAL / see-SAN ČIN’ / see-NGUUT / see-TOL / see-AAD}
amttaj bajsan.
delicious was

ここでも過去の文で üz-vel が言えるのは不思議だが、書き言葉の -vaas ~ -vees という形を話し言葉にすることによって成立している感じがするという。この文では üze-ngüüt は使えないが、Ter xoolijg idež üze-ngüüt amttaj boloxyg n’ medsen.「（おいしくないだろうと思っていたが）その料理を食べてみたら、おいしいものであるということを知った」であれば言えるという。後件には意外性を強く表明する表現が必要であることがわかる。üz-sen čin’ は「おいしくないと思っていて、食べたくもなかったが食べてみたらおいしかった」という意味だという。つまり範列的に対立する「おいしくない」との対比が強く意識された表現になることが分かる。üz-tel は食べようと思って食べた場合であるという。

[K6] Gɯ ’yorirɯr məgə {*bo-myən / *bo-dəni / bo-’ass-dəni / bo-nigga / *bo-’asə},
that food eat {see-MYƏN / see-DƏNI / see-PST-DƏNI / see-NIGGA / see-ASƏ}
mas’i ’iss’əssda.
taste was

bo-dəni は、従属節と主節が異主語でないと許容されない。

### 4.7. 原因・異主語

[J7] 兄が｛怒ると／怒ったら／?怒れば（2/2）／#怒って（3.7/2)｝、妹が泣き出した。

「怒れば」を用いると、習慣的に感じられる、もしくは兄が他のモノ／コトに対して怒っている感じがするという内省があった。「怒って」を用いると筆者には、「怒ると／怒ったら」ほどには前件と後件の間に因果関係は感じられなくなり、それぞれが勝手に（バラバラに）行為を行っている感じがする（同様の内省があった)。ただ文脈によってはどちら

の解釈にもなり得ると思われる。同時に起きた感じがするとの内省もあった。

[T7] Ağabeyi {*kız-sa / kız-ınca / *kız-ıp} kız kardeşi ağlamaya başladı.
elder.brother {get.angry-INCA / get.angry-IP} daughter younger crying begin
kız-ıp では、異主語が許容されない

[M7] Ax-yg-aa {*uurla-val / uurla-san čin' / uurla-nguut
elder.brother-ACC-REF {get.angry-BAL / get.angry-SAN ČIN' / get.angry-NGUUT
/ uurla-tal / *uurl-aad} düü n' ujlčixsan.
/ get.angry-TAL / get.angry-AAD} younger 3SG cried

Ax-yg-aa (elder.brother-ACC-REF) となっているのは、この言語で従属節中に対格の斜格主語が用いられるためである。uurla-san čin' を用いるのは、兄があまり怒るとは予想していなかった場合、めったに怒らない兄が怒ったような場合であるという。-tal の場合、兄が急に、突然に怒り出した感じがするという。uurl-aad は、Ax n' uurl-aad düü n' ujlčixsan. 「兄は怒り、妹は泣いた」とすれば言えるという。この文は、誰かがその様子を見ていて、兄と妹がそれぞれバラバラにやっているのを報告したような感じがするという。

[K7] 'Obbaga hoa {#nai-myən / nai-nigga / nai-ss-dəni
elder.brother fire {get.out-MYƏN / get.out-NIGGA / get.out-PST-DƏNI
/ *nai-dəni / nai-sə}, 'yədoŋsaiŋ'i 'urgi sijag haissda.
/ get.out-DƏNI / get.out-ASƏ} younger.sister crying start did

nai-sə を用いた場合には、日本語の「怒って」とは異なり、かなりはっきりと理由として解釈される。nai-myən を用いると、「兄が怒れば妹が泣く」ということを事前に互いに打ち合わせておいてそれが実現した、という状況、もしくは恒常的な状況でなら言えるという。

### 4.8. 原因・同主語

[J8] 風邪を｛ひいて／#ひけば（2.1/8）／#ひくと（2.3/7）／#ひいたら（2.6/13)｝、
仕事を休んだ。

「ひけば」および「ひくと」を用いると、恒常的なことのように感じられるという内省が多くあった。「ひいたら」を用いると、「風邪をひいたら仕事を休んだだろうに（実際には仕事をせざるをえなかった)」という、反実仮想に解釈する内省が多くあった。他人のことを報告しているような感じを伴うとする内省もあった。

[T8] Hasta {ol-du-m / ol-unca / #ol-up}, işe gitmedim.
cold {become-PST-1SG / become-INCA / become-IP} to.work I.not.went

olunca は、同主語、異主語のいずれも可であるという。したがって家族が風邪をひいた場合などでも使えるという。他方、olup は、(休むために）わざと意志的に風邪をひいて休んだような感じがするという。なお[T8-T14] はいずれも過去のできごとであり、そのため -sa は用いられないとされたため、例文には -sa の適格性について標示しなかった。結果の

まとめである表 3 には示した。

[M8] Xaniad {xür-eed / *xüre-ngüüt / xür-sen čin’ / *xür-tel / *xür-vel}
cold {arise-AAD / arise-NGUUT / arise-SAN ČIN’ / arise-TAL / arise-BAL}
ažildaa javaagüj.
work not.went

xüre-ngüüt は Xaniad xüre-ngüüt ažildaa javaxgüj.「風邪をひいてしまったら、仕事に行くものではない（やすまなければならない）」という文であれば言えるという。xür-sen čin’は、他人のことなら言える、すなわち「（あの人は）風邪をひいちゃったので、仕事に来なかったね」という意であるという。このことから、-SAN ČIN’ は意志による動作でなく、観察に基づく叙述を行っていると考えられる。

[K8] Gamgi’əi {gərry-əsə / #gərry-əss-‘ɯnigga / *gərry-əss-dəni / ?gərri-dəni / #gərri-myən},
to.cold {catch-ASƏ / catch-PST-NIGGA / catch-PST-DƏNI / catch-DƏNI / catch-MYƏN}
ir’ɯr sui’əssda.
work was.off

まず gərryəsə は人称の制限なく誰のことでも言えるという。gərry-əss-‘ɯnigga を用いると「風邪をひいたので」という「理由」の意味でのみ解釈されるという。その文は「なぜ休んだか」という問いへの答えに用いられる。主語は 1 人称でも 3 人称でもよいという。したがって文全体の因果関係を述べる文になっていると考えられる。gərri-dəni では、1 人称主語での叙述はできないという。すなわち「(あの人は）風邪ひいちゃって休んでしまったよ！」のような意味を実現する。このことはやはりモンゴル語と同様、gərri-dəni の「観察」という特徴によると考えられる。gərri-myən を用いると「風邪をひけば（いつも）休んだ」のような、習慣的意味に感じられるという。

### 4.9. 継続中生起・異主語

[J9] 音楽を｛聞いていたら／聞いていると（4/1）／?聞いていて（2.8/1）／#聞いていれば（2.2/9)｝、人が来た。

「聞いていれば」は、恒常的な過去の習慣を示すという内省が多くあった。原因として解釈されるという内省も 2 つあった。「聞いていて」にも原因とみる内省があった。

[T9] Müzik {dinl-er-ken / dinli-yor-ken / dinle-yince / *dinle-yip}
music {listen-AOR-CONJ / listen-PROG-CONJ / dinle-INCA / dinle-IP}
biri geldi.
someone came

トルコ語ではこのような文では、dinl-er-ken や dinli-yor-ken のように時間節を作る動詞形を用いるという。dinleyince を用いると、「音楽を聞いているから（例えばうるさくて）人が来た」の意になるという。

[M9] Xögžim {sonso-ž baj-tal / sonso-ž baj-san čin' / ??sonso-ž baj-nguut / sonso-ž baj-val
music {listen be-TAL / listen be-SAN ČIN' / listen be-NGUUT / listen be-BAL
/ sonso-ž baj-g-aad} xün irsen.
/ listen be-E-AAD} man came

sonso-ž baj-nguut はあまり文法的には感じられないが、若者であれば使うかもしれないという。sonso-ž baj-g-aad は、「（私の出している）うるさい音の音楽を聞いて（もしくは、うるさくなくともそれが気になって）、（誰か）人が来た」という意味になるという。

[K9] 'Um'ag'ɯr dɯdgo {'iss-'ɯr ddai / 'iss-ɯnigga / 'iss-'əss-dəni
music listening {be-ADN time / be-NIGGA / be-PST-DƏNI
/ *'iss-dəni / 'iss-'əsə / #'iss-ɯmyən}, saram'i 'oassda.
/ be-DƏNI / be-ASƏ / be-MYƏN} man came

'iss-ɯnigga では、聞いていた主体は誰でもよく、主語に関する人称制限はない、ただし 3 人称が主体の場合、「(音楽がうるさいなどの)「理由」で、人が来た」というニュアンスが感じられる。1 人称の場合は、たまたま来たのか、うるさいなどの理由で来たのか、両様に解釈できるという。'iss-'əss-dəni では、音楽を聴いていたのは 1 人称となる。'iss-'əsə は「理由」の解釈になり、そのような文脈を必要とする。'iss-'ɯmyən は、「(カフェで）音楽を聴いているといつも誰かが来た（ものだ)」のような恒常条件に解釈される場合に言えるという。

### 4.10. 継起的行為・1 人称主語

[J10] 私は部屋に｛入って／入ると／#入れば（2.1/9）／入ったら（3.2/1)｝
ドアに鍵をかけた。
／私が部屋に｛入って／入ると／#入れば（1.9/7）／#入ったら（2.1/9)｝
ドアに鍵をかけた。

「(私は）入れば」は恒常的・習慣的に解釈されるという内省が多くあった。「入ったら」も基本的に異主語で解釈される。「(私が）入ったら」はもっぱら異主語として解釈される。「(私が）入れば」でも異主語で解釈されるとする内省が 3 つあった。

[T10] Ben odaya {gir-ip / #gir-ince} kapıyı kilitledim.
I to.room {enter-IP / enter-INCA} key I.locked

gir-ince を用いると、別の人が部屋に入った感じがするという。すなわち異主語に解釈される。

[M10] Bi öröönd {or-ood / oro-nguut / #oro-son čin' / #oro-tol / / *oro-vol }
I to.room {enter-AAD / enter-NGUUT / enter-SAN ČIN' / enter-TAL / enter-BAL }
xaalg-aa coožilson.
door-REF locked

まず oro-nguut は同主語で解釈され、自分が入って自分でカギをかけたという解釈になる。

これに対し、主語の「私」を対格の斜格主語に替えてその主語としての機能が従属節中に収まるようにし、Namajg öröönd oro-nguut xaalgaa coožilson. とすると、異主語に解釈され、「私が私の部屋に入ったら、誰かがその自分の部屋のドアをかけた」という意味になるという。他方、ドアの再帰接辞を外し、Bi öröönd oro-nguut {xaalga~xaalgyg} coožilson.とすると、「私が私の自分の部屋に入ると、誰かが私の部屋のドアを外から鍵をかけた」と解釈される。次に、oro-son čin’ もしくは oro-tol を用いると、どちらの文も「私が部屋に入ったら、（思いがけず、その部屋にいた別の人が）ドアに鍵をかけた（私に何か乱暴でもするんじゃないか！？）」という意味に解釈されるという。つまり oro-nguut とは異なり、異主語で解釈されることになる。

[K10a] Jə-nɯn bang’əi dɯr’ə {ga-sə / *ga-nigga / *ga-ss-dəni / *ga-dəni / #ga-myən}
I-TOP to.room entering {go-ASə / go-NIGGA / go-PST-DƏNI / go-DƏNI / go-MYƏN}
mun’ɯr jamgu’əssda.
door locked

ga-dəni は 1 人称主語に関する制限から使用できない。ga-nigga および ga-ss-dəni は、基本的に前件と後件に異主語を要求するためか、この文では成立しない。主題を標示する要素 -(n)ɯn が文全体にかかっていくため、異主語の解釈ができないのである。そこで Jə-nɯn を主格による Jai-ga に替えてみる。

[K10b] Jai-ga bang’əi dɯr’ə {ga-sə / ga-nigga / ga-ss-dəni / *ga-dəni}
I-NOM to.room entering {go-ASə / go-NIGGA / go-PST-DƏNI / go-DƏNI}
mun’ɯr jamgu’əssda.
door locked

すると、ga-nigga と ga-ss-dəni はいずれも成立するようになるが、その解釈は異主語のみである。ga-dəni は 1 人称主語を許容しないため、いずれにせよ許容されない。そこでさらに主語を 3 人称に替えてみると成立する。

[K10c] Gɯ saram’i bang’əi dɯr’ə ga-dəni mun’ɯr jamgu’əssda.
that man-NOM to.room entering go-DƏNI door locked

ga-sə を用いた文がもっとも自然であり、少し有標な表現に感じられるという。前件と前件は同主語で、ある視点から観察して報告している感じがするので、このあと部屋の中で何をしているのか、気になるような感じを伴うという。最後に、ga-myən を用いると、「私は部屋に入ると（いつも）ドアに鍵をかけた」という恒常条件の意味になるという。

### 4.11. 継起的行為・1 人称主語・後件無意志

[11] 昨日の晩は疲れて、横に{<u>なると</u>／#なって（3.4/7）／なったら（3.9/2）／?なれば（2.1/2）}寝てしまった。

「横になって」を使用した場合、「横になった状態で寝てしまった」という様態節に解釈されるという内省が複数あった。「横になる」ことが意志的に解釈されるとする内省も複数あった。

[T11] Dün akşam yorgundum, {yat-ıp / yat-ınca / yat-sa-ydı-m} uyudum.
yesterday evening got.tired {lie-IP / lie-INCA / lie-SA-PST.COP-1SG} I.slept
yat-sa-ydı-m を用いると反実仮想となり、「横になれば、寝てしまっていただろう（実際には横にもならず寝もしなかった）」という意味を実現するという。

[M11] Öčigdör oroj jadraad xevtež {baj-tal / baj-san čin' / *baj-nguut
yesterday evening getting.tired lying {be-TAL / be-SAN ČIN' / be-NGUUT
/ *baj-val / baj-g-aad} untčixsan.
/ be-BAL / be-E-AAD} slept
-TAL と -SAN ČIN' はこの文で最も問題なく使える。意味はどちらも、「（最初は寝るつもりはなかったのだが、ちょっと）横になったら（そのまま）寝てしまった」という意味であるという。これに対して -NGUUT は用いることはできず、他方述語を替えた Öčigdör oroj jadraad xevtež baj-nguut sereečixsen.「昨日の夜疲れて横になったけれど、（誰かか何かの物音などが私の）目を覚ました」という文であれば使えるという。ここでは -NGUUT が逆接のような意味を実現していることに注意したい。baj-g-aad を用いた場合には、単に「疲れて横になって寝た」ことを言うのみであって、寝るつもりがあったかなかったか、ということには特に言及しているようには感じられないという。

[K11] 'Əjəis bam pigonhaisə, {*nu'u-myən / *nu'w-əss-dəni / nub-dəni
yesterday evening getting.tired {lie-MYƏN / lie-PST-DƏNI / lie-DƏNI
/ *nu'u-nigga / nu'w-əsə} ca bəryəssda.
/ lie-NIGGA / lie-ASƏ} sleeping threw.away
まず nu'u-myən は -a/-ə bərida「〜してしまう」と合わない感じがして使えない。「昨日の晩」という語があるので、習慣の解釈もできない。nub-dəni は人称制限があり 1 人称に用いることができず、「（子供などが）横になったら寝てしまった」ということを観察して報告する文となる。これに対し、nu'w-əss-dəni は 1 人称に使えるが、この場合主節の述語をはっきりと無意志の述語に替えて、nu'w-əss-dəni cam dɯryəbəryəssda.「横になったら、眠り込んでしまった」とすれば発話可能であるという。なおこの文は 3 人称主語の文としては解釈されない。nu'u-nigga を用いた場合には、nu'u-nigga cam'i 'wassda.「[直訳] 横になったら眠りが来た」とすれば自然な発話になるという。すなわち前件と後件は異主語となる。この場合、pigonhaisə「疲れて」がなければ、理由のニュアンスを伴った文（「横になったので寝てしまった」）としても解釈できるという。これら上記の諸形式に対し、nu'w-əsə を用いれば、「（寝ようと思って）横になって寝た」の意になる。この場合には、よりはっきりと無意志であることを示す ??nu'w-əsə cam dɯryəbəryəssda「横になって、眠り込んでしまった」はやや不自然であるという。

### 4.12. 継起的事象・無生物主語

[J12] ボールは｛ころがって／ころがると（3.2/0）／*ころがれば（1.7/5）
／#ころがったら（2.6/5）｝池に落ちた。

ボールが｛ころがって／ころがると（3/5）／?ころがれば（2/6）
／#ころがったら（2.7/8）｝池に落ちた。

筆者の内省では、「（ボールは）ころがると」は若干文語的な感じを伴うが、許容度は高い。「（ボールが）ころがると」では、異主語の解釈の内省が現れる。「（ボールは）ころがれば」は恒常条件に解釈されるか、「ころがれば池に落ちた（のだが落ちなかった）」のような反実仮想に解釈されるという内省があった。「（ボールが）ころがると」では異主語の解釈の内省が現れ、「（ボールが）ころがったら」では異主語の解釈が優勢であった。

[T12] Top {yuvarlan-ıp / yuvarlan-ınca} göle düştü.
ball {roll-IP / roll-INCA} to.pond fell

[M12a] Bömbög {önxör-söör / #önxrö-ngüüt / önxrö-ngüüt-ee / #önxör-sön čin’ / önxör-töl
ball {roll-SAAR / roll-NGUUT / roll-NGUUT-REF / roll-SAN ČIN’ / roll-TAL
/ önxör-böl / önxör-ööd} cöörömd unačixsan.
/ roll-BAL / roll-AAD} to.pond fell

この文では、継続的な動作を示す副動詞 -SAAR（山越 (2012): 132）を用いるのが一番自然であるという。誰も止めることなく、ただどんどんころがっていって池に落ちたことを示すという。önxör-ööd や önxör-töl を用いても同様に「ころがって落ちた」ことを示せるが、önxör-ööd の場合には「ころがったから落ちた」のような理由の解釈も可能であるという。これに対して、önxrö-ngüüt もしくは önxör-sön čin’ を使った場合には、「ボールがころがったら、何か別の人間か物が池に落ちた」ことを意味するという。つまり異主語が要求される。önxrö-ngüüt-ee と、-NGUUT の後ろに再帰人称を付した形式が可能で、これによれば同主語が可能である。ただし「（落ちるとは思っていなかったし、誰も触ってはおらず、止まっていたボールが、急な風に吹かれるなどして動き出し、それに気づかないうちに）ころがっていたらしく、（気づいたらもう）池に落ちるところだった」という意味になるという。したがって後件のみを観察した、という表現になる。

[K12] Gɯ kong’ɯn {gurr-əsə / *gurre-nigga / *gurr-əss-dəni / *~?gurrə-dəni / *gurrə-myən }
that ball {roll-ASƏ / roll-NIGGA / roll-PST-DƏNI / roll-DƏNI / roll-MYƏN}
mur’əi ddər’əjyəssda.
to.water fell

### 4.13. 継起的行為・同一主語

[J13] 冷蔵庫を｛開けて／開けると（3.8/1）／#開ければ（2/6）／#開けたら（2.8/1）｝、ビールを取り出した。

やはり「開けると」を用いるとやや文語的で、「開ければ」を用いれば恒常的に解釈される。「開けたら」を用いると異主語とする内省があった。筆者の内省では、3 人称の行為について、やや予想外の観察を報告する文にもなると思われる。

[T13] Buzdolabını {aç-ınca / aç-ıp} bira çıkardım.
refrigerator {open-INCA / open-IP} beer take.out

aç-ıp を用いた場合は同主語（ここでは文末の人称変化により「私」）の解釈しか許されない。これに対し aç-ınca では、その後ろにポーズがなければ基本的に同主語と解釈されるが、ポーズがあれば異主語の解釈も可能であるという。

[M13] Xörgögčöö {ongojlg-ood / *ongjlgo-vol / #ongojl-son čin' / #ongjlgo-tol
refrigerator {open-AAD / open-VAL / open-SAN ČIN' / open-TOL
/ *ongojlgo-nguut} pivo gargaž irsen.
/ open-NGUUT} beer taking.out came

ongjlgo-vol, ongojl-son čin', ongjlgo-tol, ongojlgo-nguut のいずれも、例えば主節が pivo garž irsen.「ビールが出てきた」という異主語の意外なデキゴトであれば言えるが、同一主語の意志的な動作 gargaž irsen.「出してきた」では言えないという。ongjlgo-tol は私が開けて他の人が出した場合は言える。他の人が開けて私が出した場合は言えない。他方、ongojl-son čin' は、開けた人も出した人も私以外の人で、前件と後件が異主語なら言えるという。-TAL は後件が観察でなければならず、-SAN ČIN' は前件後件とも、つまり文全体が観察でなければならない、という制約が考えられる。

[K13] Naiŋjaŋgorɯr {yər-'əsə / *yər-'ɯnigga / *yər-'əss-dəni / #yər-dəni / #yər-'ɯmyən },
refrigerator {open-ASƏ / open-NIGGA / open-PST-DƏNI / open-DƏNI / open-MYƏN}
maigcurɯr ggənaissda.
beer took.out

yər-'əsə には人称の制限はなく、誰が主語でも言える。yər-dəni は 1 人称主語としては解釈できず、だれか第三者が行った感じがする。yər-'ɯmyən では、「(彼は毎日仕事から戻ってきて) 冷蔵庫を開ければビールを取り出す (のだ)」のように恒常的な文でなら成立する。

### 4.14. 継起的行為＋主節の有標なモダリティ（命令）

[14] 袋から｛出して／出したら（3.5/2）／*出せば（1.4/1）／*出すと（1/0)｝、
それを食べろ。

[T14] Torbadan {çıkar-ıp / *çıkar-ınca / çıkar-ır-sa / #çıkar-ır-sa-n}
from.pouch {take.out-IP / take.out-INCA / take.out-AOR-SA / take.out-AOR-SA-2SG}
onu ye!
that eat

çıkar-ınca は、Torbadan çıkar-ınca onu ye-meli-sin(eat-OBLG-2SG). 「袋から出したらすぐそれをおまえは食べなければならない」のような述語でなら使えるという。çıkar-ır-sa は 3 人称が主語（すなわち前件と後件は異主語）、çıkar-ır-sa-n は前件・後件とも 2 人称で同主語の文として成立する。

[M14] Uutnaas n' {garg-aad / #garga-nguut / *garga-san čin' / *garga-tal
from.pouch 3sg {take.out-AAD / take.out-NGUUT / take.out-SAN ČIN' / take.out-TAL}
/ #garga-val} idčix!
/ take.out-BAL} eat

garg-aad では同主語、garga-nguut では異主語の解釈となる。garga-san čin' の場合、Uutnaas n' gargasan čin' idčixsen. と過去形の述語にすれば、「他の人が出して、自分かもしくはさらに別の人が食べた」という意味で言える。ただし同主語の解釈はできない。garga-tal は、やはり述語を替えて uutnaas n' garga-tal bitgij id! とすれば、「(誰かが) 袋から出すまで (おまえは) 食べるな」という意味で言える。garga-val idčix! は「(誰かが) もし出してくれたら (おまえは) 食べろ」という意味で言えるという。

[K14] Boŋji'əisə {ggənai-sə / #ggənai-myən / #ggənai-kədun / *ggənai(-ss)-dəni
from.pouch {take.out-ASƏ / take.out-MYƏN / take.out-KƏDUN / take.out(-pst)-DƏNI
/ *ggənai-nigga}, (gɯgəsɯr) məg'əra!
/ take.out-NIGGA} that.thing eat

ggənai-sə の前件と後件は同主語と解釈されるのに対して、ggənai-myən と ggənai-kədun では異主語として解釈される。-NIGGA は、boŋji'əisə ggənai-r tə-i-nigga (take.out-ADNFN-COP-NIGGA), gɯgəsɯr məg'əra! 「袋から｛(私が) 出すつもりだから／(彼が) 出すはずだから｝(今はまだダメだが出したらその時に) 食べろ」とすれば使えるという。ここで -NIGGA の前に現れる形式名詞 tə は、1 人称に対しては「つもり」、3 人称に対しては「はず」と訳されるような要素であるという。

## 5. 調査結果のまとめ、ならびに筆者の分析と仮説

以下表 3 および表 4 に調査結果を示す。真正条件形式と疑似条件形式と継起形式の間は太線で示した。[1]-[14]の用例のうちで、真正条件形式と疑似条件形式の両方、もしくは疑似条件形式と継起形式の両方の形式が用いられている場合には、○を太字の◎とした。これらはすなわち連続性を示す部分であると考えられる。他方、分布がはっきりと入れ替わる境界（トルコ語と朝鮮語にある）については、二重線で示した。

表 3: 調査結果のまとめ

| | [1] 反実仮想 | [2] 仮説条件 | [3] 仮説条件＋命令 | [4] 恒常条件 | [5] 事実条件 | [6] 事実条件・人称制限 | [7] 原因・異主語 | [8] 原因・同主語 | [9] 継続中生起・異主語 | [10] 継起・1人称主語 | [11] 継起・1人称・後件無意志 | [12] 継起・無生物 | [13] 継起・同一主語 | [14] 継起・命令 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| トルコ語 | | | | | | | | | | | | | | |
| (-AOR)-SA | ○ | ○ | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | × | ○ |
| -INCA | × | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | # | ◎ | ◎ | ◎ | × |
| -IP | × | × | × | × | × | × | × | # | × | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ |
| モンゴル語 | | | | | | | | | | | | | | |
| -VAL | ○ | ○ | ◎ | ◎ | △ | △ | × | × | × | × | × | × | × | × |
| -SAN ČIN’ | × | × | × | × | ○ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | # | ◎ | # | # | × |
| -TAL | × | # | ◎ | # | ○ | ○ | ○ | × | ◎ | # | ◎ | ◎ | # | × |
| -NGUUT | × | × | # | ◎ | ○ | × | ○ | × | △ | ◎ | × | # | × | # |
| -AAD | × | × | # | × | × | × | × | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ○ |
| 朝鮮語 | | | | | | | | | | | | | | |
| -MYƏN | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × | × | × | # | # | × | × | # | # |
| -DƏNI | × | × | × | × | × | × | × | △ | × | × | ◎ | × | # | # |
| -ƏSS-DƏNI | × | × | × | × | ○ | ○ | ◎ | × | ◎ | × | △ | × | × | × |
| -NIGGA | × | # | # | # | ○ | ○ | ◎ | # | ◎ | × | △ | × | × | × |
| -ASƏ | × | × | # | # | × | × | ◎ | ○ | ◎ | ○ | ◎ | ○ | ○ | ○ |
| 日本語 | | | | | | | | | | | | | | |
| -BA | ◎ | ◎ | × | ◎ | △ | △ | △ | # | # | # | △ | */? | # | × |
| -TO | × | △ | × | ◎ | ○ | ○ | ○ | # | ○ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | × |
| -TARA | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ○ | ○ | ○ | # | ○ | ◎/# | ○ | # | # | ◎ |
| -TE | × | × | × | × | × | △ | # | ○ | △ | ◎ | # | ◎ | ◎ | ◎ |

表 4: 諸形式の連続性のまとめ

| | 反実仮想 | 仮説条件 | 恒常条件 | 事実条件 | 原因 | 継起 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| トルコ語 | ————-(AOR)-SA———— | | ——————————-INCA——————————<br>——-IP—— | | | |
| モンゴル語 | ————————————-BAL————————— | | | ————————-SAN ČIN’————————<br>————————-TAL————————<br>————————-NGUUT————————<br>————————-AAD———————— | | |
| 朝鮮語 | ————————————-MYƏN————————— | | | -DƏNI-<br>————————-ƏSS-DƏNI————————<br>————————-NIGGA————————<br>————————-’ASƏ———————— | | |
| 日本語 | ————————————バ————————— | | ——————————ト——————————<br>————————————————————タラ————————————————————<br>———————— テ———————— | | | |

### 5.1. 連続性の確認

表 3 にみるように、トルコ語に関しては 3 形式の境界が明確である。真正条件形式の -(AOR)-SA の使用可能な領域は狭く、前件がかなり実現可能性の低い仮定もしくは非事実の場合（[1]-[2]）にしか用いられないようだ。他方、事実条件や原因など、前件と後件の間に何らかの因果関係が認めうる場合には -INCA が、([9] は問題だが）継起の場合は（同主語のみで） -IP が用いられるという形で、相補的に分布している。境界は少しずれているが、朝鮮語でも -MYƏN は[4]の恒常条件までしか用いられず、事実条件は疑似条件形式による。

これに対し日本語とモンゴル語では、恒常条件において、真正条件形式も疑似条件形式も用いられる。今回調査対象とした言語では、恒常条件が境界領域であることがわかる。

ヤコブセン (2011: 5) は「いわゆる条件文には、「もし」を伴いやすいもの、伴いにくいもの、伴い得ないものなど、色々あることからも分かるように、仮定性の程度が一律ではない」とし、次のような例を挙げている：

田中君に会ったらよろしく伝えてくれ。（もし）
この仕事が終わったら飲みにいく。(?もし）
来週になったらもう少し暇になる。(*もし）
薬を飲んだら元気になった。(*もし）

このように真正条件と疑似条件とは、現実世界においては仮定性の強弱のスケールおいて漸次的に推移する連続体をなしており、言語によって恣意的にその境界が定められているものと考えられる。

もう一方の、疑似条件形式と継起形式の境界に関して、モンゴル語と朝鮮語と日本語は原因を仲介にして連続した様相を見せている。特に[11]の後件が無意志述語の場合に顕著であり、[8]の原因や[12]の無生物主語の場合にも連続性が観察される。なお日本語のタラの意味領域の広さは、他の言語の諸形式に比べるとかなり例外的に映る（歴史的に未然形＋バと已然形＋バが合流して成立したことがその一因として考えられよう）。

### 5.2. 意味的ラベリングの非有効性

したがって、まずこれらの諸形式の「機能」としてこれまでの先行研究で用いられてきた条件、理由、逆接、緊接／即時、限界、継起などの意味的なラベルは有効なものではないと筆者は考える。特に疑似条件形式においては、-INCA（トルコ語：緊接の継起～条件～原因）、-NGUUT（モンゴル語：即時～条件～逆接）、-NIGGA（朝鮮語：理由～条件～逆接）など、これらの複数の機能にまたがって用いられる形式が多く存在する。他方で、継起とされているテ形のような形式（-AAD（モンゴル語）、-'ASə（朝鮮語））も、同時に原因の用法を持っていることをみた。一般に条件と理由、条件と逆接も一定の条件下で近接していることが指摘されている（有田 (2008), Haspelmath and König (1998)）。したがってこれらの意味的な違いは、その形式自体によるのではなく、広い意味での文脈によって決定されるものと考える。すなわち、前件と後件の動詞や、2 つの事象の現実世界における共起の頻度、それに伴う種々の因果関係の感じられやすさ、によって決定されるものであろう。このような考えは筆者の発想ではない。有田 (1993: 232) は、先行研究を次のようにまとめている。

> 「と」の実際的という側面は、佐久間 (1940) においてさらに詳しく論じられる。佐久間は、「と」が「条件とその結果というような、前件・後件の間の特定の関係を表現するものでなくて、単に同時性を表示するのにとどまる場合が多い」〔270頁〕ことを指摘している。そして、同じ主体の動作や変化を表すような場合には、「次の動作に先行する動作、変化のきっかけとなる作用を示して、むしろ継起の関係」〔271頁〕を表し、前後の節が持続的あるいは定常的な事態の表現の場合には、「一方が条件となって他方の事がらがあらわれるという関係は、自然生じてくる」〔271頁〕という指摘をしている。（中略）同様の見方は、三尾 (1958) にも見られる。

ここで代表的な日本語文法として、日本語記述文法研究会（編）(2008) をみると、そこでは複文を、補足節、名詞修飾節、副詞節、等位節・並列節の 4 種類に分けている。しかし同時に、「これらの従属節は、連続性をもっている」とも述べている。副詞節としては、条件節、時間節、目的節、様態節の 4 つをとりあげ、ト・バ・タラ・ナラの 4 形式は、もっぱら条件節の中の順接条件節で取り扱われている。これに対し、テ形は等位節・並列節の中で扱われている。しかし筆者はこのように副詞節と等位節をまず大きく分けてしまうことに同意しない。これは重文と複文、すなわち等位接続と従属接続が大きく異なる SAE などの言語においてこそ有効な分類であろう。この点については風間 (2012: 140-141) および風間 (2014: 165-166) でも述べたが、本稿もこの連続性を主張するものである。

このことはトやタラを「条件形式」と呼んでテと全く切り離されたものとして扱うことの問題を指摘することでもある。日本語記述文法研究会（編）(2008) は、条件文の定義に関して「2 つの事態の因果関係を表す文を条件文といい、その従属節を条件節という」とし、

きわめて広い定義を採用している[8]。テ形（および連用形）については、「主節と並ぶ内容の等位節に用いられる。その意味はさまざまであるが、事態を結びつけること（並列）がもっとも基本的な用法であり、主節との意味関係によって、対比、前触れ、継起、原因・理由、逆接、順接条件、付帯状況の用法で用いられる」としている。「因果関係」も「事態を結びつけること」も意味的な定義で、客観的にその範囲を指定できないものとなっている。

他方で、テ形の諸用法について次のような例文を示しているが、そのうちの原因や条件は欧米の言語学の枠組みにおいて副詞節で扱われるものである。

・風邪をひいて、仕事を休んだ。（原因・理由）
・わかっていて言わないなんて、ひどい。（逆接）
・参加者は、幹事を入れて 8 人だ。（順接条件）

少なくとも本稿で対象とした言語では、条件・原因・逆接などと継起は連続性を示しているものと考えられる。日本語を含め、これらの言語には欧米型の複文の分類は有効ではないと考えたい（そもそも文末の定動詞を除き文中に定形の動詞を持たないので、「複文」とみること自体にすでに問題がある）。

### 5.3. 筆者による分類 —決定的要因は何か—

しかし真正条件形式と疑似条件形式と継起形式の 3 者は、それぞれの周辺で重なりを見せながらもその中核部分は対立し、何らかの基準で使い分けられているものと考えられる。

4 節の調査結果でみてきたように、各言語における諸形式の選択は、指示転換（switch reference）や証拠性（evidentiality）、法性（modality）、意志性（volitionality）、タクシス（taxis）など、さまざまな違いとなって現れてくることがわかる。ではこれらの要因のうちの何が決定的であって、何が従属的な要因なのだろうか。以下、順に検討してゆくことにする。

#### 5.3.1. 指示転換

まず指示転換、すなわち主語の管理について考えてみると、必ずしもこれが厳密な対立

[8] 例えば Thompson et al. (2007: 255-256) (2.2.4.1 The semantics of conditionals) が条件節としているものの内容は以下のようである。

条件節の意味タイプは、以下のように分けられる。
Real（現実）
1 present（現在の状況）（62）If it’s raining out there, my car is getting wet.
2 habitual/generic（習慣的／一般的状況）（63）If you step on the brake, the car slows down.
3 past（過去の状況）（64）If you were at the party, then you know about Sue and Fred.
Unreal（非現実）
1 Imaginative（想像的状況）
a. hypothetical（仮定的状況）(65a) If I saw David, I’d speak Barai with him (what might be - hypothetical)
b. counterfactual（非事実的状況）(65b) If you had been at the concert, you would have seen Ravi Shankar (what might have been - counterfactual)
2 Predictive（予告的状況）・・・（66）If he gets the job, we’ll all cerebrate.

これを見る限り、欧米の言語学における「条件」の定義は、レアリティに関して、後件が非事実～仮説～不問であるものにもっぱら限られているようである。このように欧米の言語学における条件表現の定義および範囲は一般に日本語学におけるそれよりもずっと狭い。条件の定義の難しさについては Haiman (1978) も参照されたい。他方、Thompson et al. (2007: 257) は「インドネシアとパプアニューギニアのいくつかの言語を含む一定数の言語においては、if 節と when 節の区別はない。ただしこれらの言語のうちの多くにおいて、その中和が生ずるのは予告的条件と未来時制に対してのみである」としている。

の要因とはなっていないことが分かる。トルコ語の継起形式 -IP は同一主語のみを許容するが、真正条件形式 -SA と疑似条件形式 -INCA は同一主語でも異主語でもかまわない。モンゴル語、朝鮮語、日本語の継起形式はいずれも同主語のみならず異主語を許容する。朝鮮語の疑似条件形式には同主語異主語の対立があるが、一部では両方が可能である。

Givón (1983: 77-78) は「正統な（canonical）」同主語／異主語の対立として次の 2 種をあげている：

(a) 先行（anticipatory）―（チュアヴェ語、フア語、ユマン語族（西海岸））
**次節**の同主語／異主語を予言。

(b) 非先行（non-anticipatory）― レナケル語、英語、スペイン語、ランゴ語
**上位節**または**前節**の同主語／異主語を表示。

その上で①(a)タイプの同主語／異主語を持つ言語は全て、厳格な SOV 言語であり、②そうした言語では全て、同主語／異主語は**動詞接尾辞**(＝節末)として現れ、③そうした言語では全て、**中間動詞―非定形節**のみが同主語／異主語に関わり、④非定形節は TAM や**一致**などをあまり表示せず、⑤こうした言語では全て、同主語標識は異主語標識よりも常に**小さい**、としている。ただしこのタイプの指示転換は必ずしも厳密に同主語／異主語を標示するものではないという。これらの特徴はすべて今回対象とした言語の状況に当てはまる。したがって筆者は指示転換の機能は 2 次的なものであって、他の違いから生み出されるものであると考えるが、この点については後述する。

### 5.3.2. 背景化

筆者は最終的に使い分けの決定的要因は、2 段階になっていると考える。その第 1 段階は背景化である。次の 2 文を比べてみると、「と」には背景化の機能があるが、「て」にはないことがわかる。

・［ボールは風に押され**て**転がる**と**］池に落ちた。
・［ボールは風に押される**と**］転がっ**て**池に落ちた。

背景化についてはさらに稿を改めて十分に検討したいが、ひとまず背景化の機能を持つ真正条件形式や疑似条件形式が、それを持たない（つまりその点に関してデフォルトの）継起形式と対立するものとして話を進めたい。

### 5.3.3. 証拠性 ―「判断」と「観察」―

ここでもう一度、「たら」と「と」に対する蓮沼 (1993) の仮説を見直してみよう。

仮説1: 事実的な「たら」は、前件の事態が成立した状況において、後件の事態を話し手が実体験的に認識するといった関係を表す場合に使用される。

仮説2: 事実的な「と」は、前件の事態が成立した状況における、後件の事態の成立、あるいはそれに対する認識の成立を、話し手が外部からの観察者の視点で語るような場合に使用される。

したがってこれらの疑似条件形式は、前件の動詞が取る形ではあるが、後件のデキゴト

の性質によってその選択は決定されるものであることがわかる。他方、SAE における接続詞（if や because, when など）は前件と後件の両命題の論理的関係に基づいて選択される。

ここでまず真正条件形式についてみると、トルコ語では反実仮想と仮説条件にしか使用できない。モンゴル語と朝鮮語と日本語ではさらに恒常条件にも使用できるが、後件がさらにアクチュアルに実現した事実となるともはや使用できない。このような真正条件形式について、筆者はこれを**「判断」**という特性を持つ形式と考えたい。反実仮想と仮説条件では、後件は非現実のデキゴトであるので、前件と後件の間に因果関係があるとするのは、話し手の判断による。問題は恒常条件だが、SAE などではこの場合にいわゆる条件形式はあまり用いられない（『語学研究所論集』20 号のデータによる）。恒常的に起きることは少なくとも過去に実現している「事実」であるので、事実／非事実を問題とし、非事実に条件形を用いる SAE では条件形を用いるべきではない事象ということになる。他方、モンゴル語・朝鮮語・日本語では経験に基づき今後もそのような因果関係が生ずると判断するので、真正条件形式を用いるものと考える。モンゴル語や日本語で疑似条件形式が真正条件形式と並んで恒常条件を示しうるのは、真正条件形式が経験に基づき恒常条件を提示するのに対して、疑似条件形式は観察に基づき恒常条件を提示するものと考えられる。

次に疑似条件形式をみると、先行研究は上記の蓮沼 (1993) にあるように後件を認識／観察するものととらえている。朝鮮語においても 2.2.3.節でみたように、-NIGGA についてその本質を発見であるとしている。

> 「A -nigga B」の文章構造は本質的に‘A であるとき B だ、という事実を発見する（発見するようになる）’という‘発見(discovery)’である。　　（五十嵐 (1997: 177）再掲）

モンゴル語に関しても、[M1], [M3], [M4], [M6]などの例文は、特に -SAN ČIN’ が前件の時点での新しい事態もしくは意外な事態の出現を示すことを示唆している。朝鮮語の -DƏNI には人称制限があり、1 人称には用いられず、しかも同主語でなければならない。したがってこの形式は観察としての性質を最も強く示しているものと思われる。

このように疑似条件形式にみられる人称制限や非意志性、モダリティの制限などの特性は、**「観察」**という特徴に還元できるものと考えたい。1 節で考察したように事実条件文に現れる過去形は意外性（mirativity）を示すものと考えられる。

最後に、継起形式はおそらく真正条件形式や疑似条件形式と対立し、それらが持っている特性（判断および観察）に対する**デフォルトの意味**を実現するものと考えられる。判断も観察も伴わない述語は、文末の主節述語がその文で示しているのと同じ性質を帯びるものと考えられる。暗示型主要部標示型の言語（風間 (2015)）では、主語が非出現の場合に述語が意志動詞であれば、シルバーシュティーンの名詞句階層のより左側の名詞が主語として行う意志的動作を示すものと考えられる（風間 (2016: 81-85)）。したがってその場合継起形式も意志的な動作を示すことになるだろう。したがって明らかに前件と後件の意志無意志が食い違う場合には、基本的に継起形式は用いられないと考えられる（1 節の蓮沼 (1993) のまとめでみたように、食い違う場合はまさに疑似条件形式が使われる条件となる）。

この点を今回の調査例文で確認すると次のようになる。まず前件と後件の意志無意志が食い違っているケースは[1], [2], [3], [5], [9]で、いずれも継起形式テを許容しない。他方意志

無意志が一致しているのは[7], [10], [11], [12], [13], [14]でこちらは継起形式テを許容している。やや問題なのは[4]「*夏になってよく雨が降る（前件無意志・後件無意志）」と[8]「風邪をひいて仕事を休んだ（前件無意志・後件意志(?)）」である。[4]については、「夏になって雨が降った」であれば問題ないので、恒常性が因果関係を生じさせ、単なる継起形式の接続を阻んでいるものと考える。[8]については、後件は「休まざるを得なかった」という無意志で解釈されているものと考えたい。トルコ語の話者の内省にもあったが、もしわざと意志的に風邪をひくことが可能であれば、この文は「(仕事を休みたくてわざと）風邪をひいて仕事を休んだ」と解釈することができる。

このように意志性はあくまでも文末の述語と同じ性質を帯びるために現れてくるのであって、継起形式自体はその点に関してデフォルトであると考えれば、[12]のような無生物主語の文でも継起形式が現れることが説明できる。

### 5.3.4. タクシスと主題化要素

上記のように筆者は、共時的には形式の選択は背景化と証拠性によって体系化されているものと考える。しかし通時的な起源はこれとは異なることが考えられる。その起源のうちの 1 つは相対テンスもしくはタクシスとしてのアスペクトである。トルコ語の -INCA やモンゴル語の -NGUUT および -TAL は、おそらく佐久間 (1940) が日本語の「と」に関して指摘していたのと同じように、同時性を示すものが起源であり、それが本来的な機能であったと考えられる。現在でもモンゴル語の -NGUUT および -TAL はそうした性格を強く示している。不完結相のアスペクトを持つ形式はテキストの中で「同時性」を実現し、これに対し完結相の形式は「継起」の性質を示すことが指摘されている（工藤 (1995: 23-24)）。したがって同時性の要素は 5.3.2.で述べた背景化の原因となる。逆接などの機能も、特にこの不完結相のアスペクトから生じるものと考えられる（例えば、5.2.節でみた「わかっていて言わないなんて、ひどい。(逆接)」の例を参照)。

1 節でみたヤコブセン (2011) の指摘にあったように、比較的変わりやすい一時的な状態であるほど、事実的情報は許容されやすくなる。次のような例文における諸形式の容認度を比べると、何らかの限界性があり、その限界後の状況のうちに後件で生起した事態の観察がなされる場合には、事実条件が成り立つものと考えられる（容認度の判断は筆者による）:「音楽を｛*聞くと／*聞いたら／1 曲聞いたら／聞いていたら｝人が来た」。これはヤコブセン (2011) のいう「時間的複数性」によって説明できるだろう。すなわち、限界のある事象では、限界の時点の前後に対比的な状況が生ずる。限界の時点より後の状況で、しかもその変化の効力が作用している状況で、後件に新たな状況の出現の発見が語られれば、それは因果関係として捉えられるだろう。こうしたプロセスによって仮定性が認識され（疑似）条件形式の使用が許容されるものと考えられる。

さらに別の観点からみれば、これらの言語でアスペクト的な機能の形式が通時的な起源となることの原因はおそらく、次のようなことであろう。すなわち、アルタイ型の言語においては、文末述語が文全体のテンスを決定するために、文中の連用的な動詞の諸形式、つまり諸副動詞形は、文末述語に対する相対的な時制さえ示せばよい。他方、このタイプの言語は多くの副動詞形を持っているが、そのうちいくつかの不完結的なものは同時に起

きることを話者が観察することになるので、因果関係を帯びやすくなり、疑似条件形式へと発展してゆくものと考えられる。

もう 1 つの起源は -SAN ČIN’ に観察される主題化要素で、これは範列的な対立要素との対比を強く示す（例えば [M6]）。ただしこれは通言語的には、真正条件形式の形成に働くものと考えられる（例えば、ハと同起源をもつ日本語のバや、条件的に機能するテハ：「今のことを先生に話されては困る」「郷に入っては郷に従え」（両例はヤコブセン (2011: 17) より）。この点に関しては Haiman (1978) も参照されたい。

### 5.4. 今後の課題

まず今回の調査における問題点は、日本語以外、各言語の調査結果がもっぱら 1 人の話者からの聞き出しに基づいていることであろう。トルコ語とモンゴル語については特に国内で複数の話者から調査することが容易でなく、また調査できた場合でも条件を統一し、判断が分かれた場合などには点数化などの処理も必要となるため、今回は時間と労力の面で実現が難しかった。したがって今回の調査結果については当然個人差の存在することを考慮する必要がある。5 節における筆者の分析と仮説は十分に整理して書くことができなかった。実証的な裏付けもなお不十分な点が多いと考える。各言語の個々の疑似条件形式について、どのような条件下でどのような意味が前面に出てくるのかもなお十分に解明できていない。これらの点を今後の課題としたい。

［謝辞］

時間を割いて調査例文の適格性を判断するとともに貴重なコメントをくださったコンサルタントの方々に深くお礼を申し上げたい。貴重なコメントをくださった査読の先生方にも記してここに心よりお礼申し述べたい。

### 略号一覧

ACC: accusative
ADN: adnominal form
AOR: aorist
COND: conditional
COP: copula
E: epenthetic vowel/consonant
FUT: future
LOC: locative
NEG: negative
NOM: nominative
PL: plural
PN: proper noun
PST: past
PTCP: participle
Q: interrogative marker
REF: reflexive
SG: singular
TOP: topic

### 参考文献

秋廣尚恵 (2015) 「データ：（連用修飾的）複文　フランス語」『語学研究所論集』20. 77-90.
有田節子 (1993) 「日本語条件文研究の変遷」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』225-278. 東京：くろしお出版

有田節子 (2008) 「「あなたがそう言うから／なら別れることにするわ」―理由も条件も同じコインの裏側」『言語』37-10. 76-83.

Givón, T. (1983) Topic continuity in discourse: the functional domain of switch reference. J. Haiman and P. Munro (eds.) *Switch-reference and universal grammar*. Proceedings of a symposium on switch reference and universal grammar. 51-81. Winnipeg: John Benjamins.

Haiman, J. (1978) Conditionals are topic. *Language* 54-3, 564-589.

Haspelmath, Martin and Ekkhehard König (1998) Concessive conditionals in the languages of Europe. Johan van der Auwera (ed.) Adverbial constructions in the languages of Europe (Empirical Approaches to Language Typology/EUROTYP, 20-3), 563-640. Berlin: Mouton de Gruyter.

蓮沼昭子 (1993) 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志（編）『日本語の条件表現』73-97. 東京：くろしお出版

林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』東京：白水社

五十嵐孔一 (1997) 「「原因・理由」を表す接続形-seoと-nikkaについて」『朝鮮学報』第162号 15-60.

風間伸次郎 (2012) 「アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」『北方言語研究』2. 139-162. 北海道大学大学院文学研究科.

風間伸次郎 (2014) 「日本語の類型について ―「アルタイ型言語」の解明を目指して―」『北方言語研究』4. 157-171. 北海道大学大学院文学研究科.

風間伸次郎 (2015) 「日本語（話しことば）は従属部標示型の言語なのか？」『国立国語研究所論集』9. 51-80.

風間伸次郎 (2016) 「地域的・類型論的観点からみた無生物主語について」『北方言語研究』6. 81-110. 北海道大学大学院文学研究科.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）(1996)『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』東京：三省堂

河野六郎 (1947) 「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」『Tôyôgo Kenkyû』2, 河野 (1979) 所収. 96-97.

河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集 I』東京：平凡社

Kullmann and Tserenpil (1996) *Mongolian Grammar*. Honk Kong. Jenso. ltd.

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト ―現代日本語の時間の表現―』東京：ひつじ書房

黒島規史・孫ミナ (2015) 「朝鮮語の連用修飾的複文」『語学研究所論集』20. 165-179.

Lewis, G. L. (1967) *Turkish grammar*. Oxford: Oxford University Press.

前田直子・大島資生 (2014) 「連用修飾節・連体修飾節構造に関する研究の動向と課題」『日本語複文構文の研究』東京：ひつじ書房

三尾砂 (1958) 『話ことばの文法』東京：法政大学出版局

宮内拓也・佐山豪太 (2015) 「データ：（連用修飾的）複文　ロシア語」『語学研究所論集』20. 143-152.

Nam gisim・Ru kopɯ (1983) Nonrijəg hyəŋsigɯrosə‘ɯi ‘-nigga’ gumungwa ‘-əsə’ gumun. *Gug‘ə‘ɯi toŋsa・ ‘ɯimiron*. Tabcurpansa.

成田節 (2015) 「データ：（連用修飾的）複文　ドイツ語」『語学研究所論集』20. 63-76.

日本語記述文法研究会（編）(2008) 『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』東京：くろしお出版

奥真裕 (2015) 「データ：(連用修飾的) 複文　トルコ語」『語学研究所論集』20. 321-322.

佐久間鼎 (1940) 『現代日本語法の研究』東京：厚生閣／くろしお出版

Shopen, T. (ed.) (2007) *Language typology and syntactic description. vol. II: complex constructions. 2nd edition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Song, Jae-mok (2011) '-uni'wa '-teni', '-essdeni'uy uymi kinung: cepsok kwankyeylul cwungsimulo. *Hankwuk uymihak* 34, 185-212. ［「'-uni' と '-teni', '-essdeni' の意味機能：接続関係を中心として」『韓国意味学』34, 185-212.］

Thompson, Sandra A., Robert E. Langacre and Shin Ja J. Hwang (2007) Adverbial clauses. In T. Shopen ed. (2007), 237-300.

梅谷博之 (2003) 「モンゴル語の二人称所属接辞」『東京大学言語学論集』22. 209-232.

梅谷博之 (2008) 『モンゴル語の使役接辞 -UUL と受身接辞 -GD の構文』博士論文．東京大学

Underhill, R. (1976) *Turkish grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

ヤコブセン，ウェスリー・M. (2011) 「日本語における時間と現実性の相関関係―「仮定性」の意味的根源を探って―」『国語研プロジェクトレヴュー』5. 1-19.

山田洋平 (2015) 「データ：(連用修飾的) 複文　モンゴル語」『語学研究所論集』20. 181-194.

山越康裕 (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』東京：白水社

油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 編 (1993) 『朝鮮語辞典』 東京・ソウル：日本・小学館 韓国・金星出版社共同編集

Gradational Continuity between Conditionals and Sequentials:
with Special Focus on the Pseudo-Conditional Forms

Shinjiro KAZAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

In the present paper I examined some converbial forms of Turkic, Khalkha Mongolian, Korean and Japanese by elicitation in order to reveal their range of function and the criteria to make proper use of them. From the crosslinguistic viewpoint, a typical conditional form tends not to be used for an event such as *mado=o aketara tumetai kaze=ga haitte kita* (When I opened the window, a cold wind came in). However, the Altaic-type languages such as Japanese often have so-called *pseudo-conditional form*s which are multi-functional and realize a wide meaning not only of conditional but also temporal, causal and concessive. On the one hand these pseudo-conditional forms exhibit the functional continuity to the proper conditional, and on the other hand they exhibit the functional continuity to the sequential. The results of the research are summarized in Table 1.

Table 1: The functional continuity between the forms

| | Counterfactual | Proper conditional | Habitual -conditional | Functional -conditional | Causal | Sequential |
|---|---|---|---|---|---|---|
| Turkic | ————-(AOR)-SA———— | | ——————————-INCA—————————— | | | —-IP— |
| Mongolian | ——————————-BAL————————— | | | ————————-SAN ČIN’————————— | | |
| | | | | ————————-TAL———————————— | | |
| | | | ——————————-NGUUT————————— | | | |
| | | | | | ————-AAD————— | |
| Korean | ————————————-MYƏN————————— | | | | | -DƏNI- |
| | | | | ————————-ƏSS-DƏNI————————— | | |
| | | | | ————————-NIGGA————————— | | |
| | | | | | ————-’ASƏ————— | |
| Japanese | ————————————-BA———————————— | | | | | |
| | | | ——————————-TO———————————— | | | |
| | ——————————————————-TARA——————————————————— | | | | | |
| | | | | | ————————-TE————————— | |

（かざま・しんじろう　kazamas@tufs.ac.jp）